第26回　クロベンケイガニ

カニというと水の中の生きものというイメージがありますが、クロベンケイガニは水辺にすむ陸のカニです。もともと河口付近に生息するもので、河北潟地域では、汽水である大野川に沿った堤防（土手）に巣穴を掘って生活しているのが知られています。昼間は巣穴に潜んでいることが多いようですが、夕方頃に巣穴から這いだして陸上を徘徊していたり、ヨシ原の中のコンクリート壁に、集団でへばりついていたりするのを見かけます。

甲羅の大きさは3－4cmで、アカテガニと同じくらいの大きさです。その名の通り少し黒っぽい色をしており、脚には硬くて長い毛が目立ちます。大きなハサミはやや紫色をしています。動きは素早く、捕まえるにはコツがいります。カニなので鰓呼吸をしますが、体の中に蓄えた水を体の外と循環させることで、水の無いところに長く留まることができます。産卵に際しては、雌がいわゆる「ふんどし」といわれる腹部にて抱卵した卵を海に運び、海で孵化した幼生はプランクトン生活を経て、稚ガニとなって河口域に戻って来ます。

大野川の土手沿いには、かつてはヨシ原が多くありました。ヨシ原は彼らにとって良い隠れ家のようで、ヨシ原の中でごそごそと動いている個体に近づくと、見つからないようにヨシの影に隠れ、最後には水の中に逃げ込みます。またクロベンケイガニは雑食性で、植物や死んだ魚などを食べるということから、いろいろな浮遊物が集まるヨシ原は好適な採餌場でもあると思われます。

近年の大野川堤防の改修が行われて以降は、クロベンケイガニは随分と少なくなりました。土手がしっかりと固められて巣穴をつくる場所が無くなったことと同時に、大野川のヨシ原が著しく衰退していることが関係しているものと思われます。大野川のヨシの衰退の原因は河北潟全体にいえることですが、堤防がその重さで年々沈んできているため、それに沿った水際も引き込まれて沈み、ヨシ原が水没してしまっています。また、最近は浅野川河口の浚渫も行われていますが、今後、水際が滑り込んで深くなることも考えられます。また、堤防陸側の水田の圃場整備や水路改修も、クロベンケイガニがすみにくくなる要因になっていると思われます。

河北潟では普通の生きものだったクロベンケイガニでしたが、だんだんと希少生物になってしまいました。（文　高橋　久）